

第 51 回日本実験動物学会総会からみた最近の研究動向

倉 林 謙

岡山実験動物研究会長

去る平成 16 年 5 月 20 日～22 日の 3 日間、長崎のブリックホールおよびその近隣会場で長崎大学の佐藤浩大会長によって開催された。本会は第 38 回日本実験動物技術者協会総会と第 1 回アジア実験動物学会連合 (AFLAS) 学術集会とが同一時に開催された。このことは SARS、鳥インフルエンザ、そしてテロ問題がある中でそれらを良く克服され、九州実験動物研究会のスタッフが全面的バックアップされ、統一がとれた素晴らしい大会であったと思われる。

さて、研究動向であるが、ここ長崎は蘭学医・博物学者のシーボルトやオランダ海軍医ボンペ近代西洋医学を伝え医学教育を行った地である。また、斎藤茂吉や長崎系腹水肉腫、後の吉田肉腫を樹立された吉田富蔵博士が在籍された地でもある。

今大会の特色は、生命科学の発展がめざましいものがあり、国立大学の法人化に因みあらゆる領域に競争の原理が働き、知的財産を意識できる研究が多く発表された。一般演題は口頭発表よりも米国の AALAS 的な一般演題発表 (ポスターセッション) を採用した。特別講演 2 題、シンポジウム 10 演題を中心に実験動物科学領域の最新領域の知識を出席者全員で共有・吸収できる企画を展開された。AFLAS からは実験動物科学の各種演題 20 演題が発表された。

特別講演は、山内一也先生による「ウイルスと人間」と米国オクラホマ州立大学リチャード・エバリー教授は「霊長類のヘルペスウイルス」というそれぞれのテーマで講演があった。山内先生の講演は新興・再興ウイルス感染症を理解するには格好なものであり、動物由来の感染症のトピックスに関わるご講演であった。また、リチャード・エバリー教授はわが国のサルにも存在する B ウイルス関係のゲノム構造や新科学的考察、診断、検査関係の新しい知見を紹介された。

また、シンポジウムは、学会の学術委員会主催の「ジェノタイプ、フェノタイプ、そしてドラマタイプ」槇野先生・芹川先生座長のほか、「ストレス研究最前線—各種ストレス環境における生体反応」局先生・朱宮先生座長、「トランスジェニックウサギの開発とその臨床的有用性」範先生・北嶋先生座長、「サル類の飼育繁殖・現場から生まれる最新医療研究」鳥居先生、山海先生座長、「実験動

物にスローフードは必要か—老化 (長寿科学) 研究の現状と展望を探る」下川先生・田中先生座長、「適切な動物実験実施をめざして」浦野先生・大和田先生座長、「技能と技術と研究と」小山内先生・坂本先生座長、「生殖工学技術とその応用」越本先生・中瀧先生座長、「医学・医療における実験動物の位置付けとその役割」山村先生座長、「マスト細胞を巡る疾患モデルの近況」松田先生・実宝先生座長等の 10 演題のシンポジウムがあった。

一般演題は 293 題の演題が出題された。一定時間 1 時間の間にフリーディスカッションを行い、意見交換を行った。

また、ブリックセミナーは学会のワークショップと協会の教育セミナーを合体させ 7 つの企画を開催した。「実験動物の麻酔」講師：倉林と西村先生。「胚と精子の凍結保存」講師：日置先生、外丸先生、高橋先生、倉持先生。「遺伝子マッピングとその応用」講師：加藤先生、石川先生、多屋先生、「微生物モニタリング」講師：伊藤先生、高倉先生、後藤先生。「職場でできる PCR」講師：大沢先生、三好先生。「環境モニタリング」講師：小原先生、吉田先生、蜂巢先生。「バイオリソースとしての野生げっ歯類」講師：土屋先生。篠原先生らが熱心なご講義をされて、特に初心者および熟練者らへの教育に当たった。

関連集会として、第 14 回 LEC ラット研究会大会、日本疾患モデル学会、日本実験動物医学会、第 30 回日本実験動物環境研究会、第 41 回動物実験施設連絡会議、公私立大学総会、助手会・若手セミナー等が開催された。第 14 回 LEC ラット研究会では、LEA ラット系統から確立された糖尿病モデル・センダイラット、笠井先生、LEC ラット研究と再生医療：後藤先生。日本実験動物医学会では「実験動物由来の感染症」座長：黒澤先生。

第 30 回日本実験動物環境研究会は「実験動物施設を守るために」座長：北林先生・朱宮先生らが行った。

本会を通じてウエルカムパーティーに長崎港めぐり、野外懇親会と称してグラバー園にて行った。雨天のことをも考慮しているところは学会内容同様素晴らしい企画力であった。

また、ランチョンセミナーが適当に配分されていたことは、適当な昼食と休憩がとれてよかった。